

佐伯梅友博士年譜および著述目録

森野宗明編

この年譜及び著述目録は、昭和三十八年四月出版の『万葉語研究』（有朋堂、昭和四十四年六月出版の『佐伯梅友博士古稀記念国語学論集』（表現社、昭和四十四年十二月発行の『日本文学研究特集号 佐伯梅友先生古稀記念論集』（大東文化大学日本文学会）に所収の年譜・著述目録を参考にし、加筆して作成したものである。作成にあたっては、出雲朝子・大倉浩・北原保雄・関一雄・高橋昭・橋本修各氏の協力を得た。

年譜に関しては、学歴で、卒業年度と入学年度が同年で継続している場合に限り卒業年度を、職歴についても、退職年度と就職年度とが継続している場合は、退職年度を省略した。

著述目録に関しては、著書、編書、論文の三種に分類し、出版年月順に配列した。その際に、書評・学界展望・紹介・対談・詩歌、および教科書・参考書などは割愛した。

年 譜

明治三十二年一月十三日 埼玉県比企郡小川町下小川に、西光寺住職、大寺秀明の五男として誕生

明治三十八年四月 小川町尋常小学校入学

明治	四十年二月	佐伯家に入籍（養父作威は母の弟）
明治	四十四年四月	小川町尋常高等小学校進学
明治	四十五年四月	埼玉県私立埼玉中学（現県立不動岡高校）入学
大正	七年四月	東京高等師範学校文科第二部入学
大正	十一年三月	奈良県師範学校教諭
大正	十二年十月	女子学習院助教
大正	十四年四月	京都帝国大学文学科選科入学
大正	十五年四月	京都帝国大学文学科本科編入
昭和	三年四月	私立成城高等学校教授
昭和	六年四月	京都府立医科大学予科教授
昭和	八年三月	京都帝国大学文学部講師嘱託（昭和八・九、十二、十六年度）
昭和	十七年五月	東京文理科大学助教
昭和	二十年十月	叙勲六等、授瑞宝章
昭和	二十四年四月	東京教育大学講師併任
昭和	二十七年七月	東京教育大学文学部教授
昭和	二十九年五月	文学博士
昭和	三十一年十二月	国語審議会委員（昭和三十三年十一月まで）

昭和三十四年三月 国語審議会委員(昭和三十六年三月まで)
昭和三十六年三月 東京教育大学退官

四月 大東文化大学教授

この年、自宅内に佐伯古文研究所を設け、「古文研究」を刊行。

昭和三十七年三月 東京教育大学名誉教授

昭和三十八年二月 国立国語研究所評議会委員(昭和五十九年二月ま

で)

昭和四十二年十一月 紫綬褒章授与

昭和四十四年四月 大東文化大学学長(昭和五十年三月まで)

昭和四十五年十一月 勲三等旭日中綬章授与

昭和四十九年七月 国立国語研究所評議会副会長(昭和五十九年二

月まで)

昭和 五十年四月 大東文化大学名誉教授

平成 六 年十月十二日逝去 九十五歳

平成 六 年十月 叙正四位

この間、武道専門学校、関西大学、立命館大学、国士館大学、実践女子大学、お茶の水女子大学、東洋大学、東京女子大学、愛知大学、愛知県立大学、宇都宮大学、静岡大学、岩手大学、昭和女子大学に出講した。

著述目録

・著書(共著も含む)

『万葉集の総合研究第一輯』(共著)(改造社、昭和十年三月)

『新校万葉集』(共著)(楽浪書院、昭和十一年九月)

『国語史上古篇』(国語史第三卷)(刀江書院、昭和十一年十一月)

『源氏物語総釈第三』(胡蝶・蛍・常夏・篝火・野分・行幸)(楽浪書院、昭和十二年八月)

『万葉語研究』(文学社、昭和十三年十月)

『校註万葉集 古今相聞往来歌』(武蔵野書院、昭和十五年十一月)

『国語要講』(武蔵野書院、昭和二十二年十二月)

『万葉集一〇五』(日本古典全書)(共著)(朝日新聞社、昭和二十二年十二

月、昭和三十年五月)

『堤中納言物語』(新註国文学叢書)(講談社、昭和二十四年二月)

『新版新校万葉集』(共著)(創元社、昭和二十四年九月)

『国語史要』(武蔵野書院、昭和二十四年十二月)

『奈良時代の国語』(国語双書)(三省堂、昭和二十五年九月)

『源氏物語新抄』(校註日本文芸新篇)(武蔵野書院、昭和二十六年十月)

『国文解釈の方法と技術』(共著)(至文堂、昭和二十八年二月)

『通解対照徒然草新釈』(金子書房、昭和二十八年四月)

『古典文学』(西東社、昭和二十八年五月)

『堤中納言物語新解』(共著)(明治書院、昭和二十九年一月)

『万葉集評釈』(有精堂、昭和二十九年五月)

『更級日記の新しい解釈』(至文堂、昭和三十年四月)

『古今和歌集』(日本古典文学大系)(岩波書店、昭和三十三年三月)

『古文解釈のための古典文法要講』(共著)(武蔵野書院、昭和三十四年

二月)

『和泉式部集全釈』(共著)(東宝書房、昭和三十四年六月)

『枕草子の研究』(共著)(續文堂、昭和三十四年七月)

『国語概説』(秀英出版、昭和三十四年十一月)

『国語国文学研究史大成第十五卷国語学』(共著)(三省堂、昭和三十六

年二月)

『万葉語研究』(有朋堂、昭和三十八年四月、著作年表をあらたに付して再刊)

『上代国語法研究』(大東文化大学東洋研究所、昭和四十一年十二月)

『和泉式部集全釈続集篇』(共著)(笠間書院、昭和五十二年十月)

『古今和歌集』(岩波文庫)(岩波書店、昭和五十六年一月)

『徒然草』(全対訳日本古典新書)(創英社、昭和六十一年六月)

『古文読解のための文法 上・下』(三省堂、昭和六十三年二月)

『源氏物語講読 上』(武蔵野書院、平成三年十一月)

『源氏物語講読 中』(武蔵野書院、平成四年七月)

『源氏物語講読 下』(武蔵野書院、平成四年十一月)

・編書(共編を含む)

『万葉集研究年報』(共編)(第一輯〜第十一輯、岩波書店、昭和六年五月〜昭和十七年四月)

『義門全集(上)』(共編)(帝国教育会、昭和十八年八月)

『万葉集大成第十三卷本文篇二』(平凡社、昭和二十八年十一月)

『万葉集大成第十四卷本文篇三』(平凡社、昭和二十九年七月)

『万葉集大成第六卷言語篇』(平凡社、昭和三十年五月)

『紫式部日記用語索引』(日本学術振興会、昭和三十一年一月)

『角川漢和辞典』(共編)(角川書店、昭和三十一年九月)

『現代漢字辞典』(小学館、昭和三十一年十二月)

『新選国語辞典』(共編)(小学館、昭和三十四年十一月)

『学習国語大辞典』(講談社、昭和三十四年十一月)

『小学国語辞典』(講談社、昭和三十五年十一月)

『かげろふ日記総索引』(共編)(風間書房、昭和三十八年二月。なお、改訂新版が同社から昭和五十六年三月に刊行)

『対照関連反対語辞典』(集英社、昭和三十八年四月)

『新校かげろふ日記』(共編)(風間書房、昭和三十九年四月)

『講談社古語辞典』(共編)(講談社、昭和四十四年十二月)

『基礎古語辞典』(共編)(教育出版、昭和五十年十一月)

『例解古語辞典』(共編)(三省堂、昭和五十五年一月)

『文学のための日本語文法』(国語教育叢書3)(三省堂、昭和六十一年六月)

『概説・古典日本語文法』(桜楓社、昭和六十三年二月)

『万葉集の助詞二種——「の」及び「や」「か」について——』(『国語国文』の研究)第二十二号、昭和三年七月)

・論文

『可良波志考』(『国語国文の研究』第四十九号、昭和五年十月)

『楊貴妃のためし』(『月刊日本文学』第一卷第四号、昭和六年九月)

『秋風も未だ吹かねば——「ぬに」と「ねば」について——』(『国文学誌』第一卷第六号、昭和六年十月)

『中古語の敬語について』(『国漢研究』第六号、昭和七年二月)

『万葉集「不知」の訓について』(『松井博士古稀記念論文集』日黒書店、昭和七年二月)

『みちのくはいづくはあれど』(『岩波講座日本文学付録文学』第二卷第十号、昭和七年四月)

『推量の助動詞について』(『丘』第七号、昭和七年六月)

『万葉集「泣く」「泣くる」考』(『国語・国文』第二卷第十号、昭和七年十

月)

月)

月)

月)

月)

月)

「万葉集品詞概説2——形容詞・動詞・助動詞——」(『万葉集講座言語研究篇』春陽堂、昭和八年六月)

「『いかに』といふ語について」(『文学』第一卷第四号、昭和八年七月)

「上古の国語」(『国語科学講座V国語史学』明治書院、昭和八年八月)

「万葉集の『己』の字の訓について」(『文学』第一卷第六号、昭和八年九月)

「万葉集『所依』『所縁』の訓について」(『文学』第二卷第三号、昭和九年三月)

「万葉集卷十一の歌一首」(『奈良文化』第二十六号、昭和九年六月)

「『も』の或る場合」(『国語・国文』第四卷八号、昭和九年八月)

「省略の或る場合」(『国語・国文』第四卷第十一号、昭和九年十一月)

「万葉集の『難』『不勝』『不得』の訓について」(『京都帝国大学国文学会二十五周年記念論文集』星野書店、昭和九年十一月)

「万葉集卷十一の歌一首」(『上代国文』第一卷第一号、昭和九年十一月)

「山部赤人」(『日本文学講座第七卷和歌文学篇下』改造社、昭和九年十二月)

「万葉集小考」(『立命館文学』第二卷第二号、昭和十年二月)

「日本文学史概説」(『日本文学講座第十六卷国語文法篇』改造社、昭和十年二月)

「万葉集卷十に於ける連作」(『文学』第三卷第四号、昭和十年四月)

「語法的に問題のある柿本人麻呂の歌二首」(『国語教室』第一卷第二号、昭和十年五月)

「文法・修辞・歌格」(『短歌研究』第四卷第九号、昭和十年九月)

「仮名づかひと詞のはたらきと」(『国語・国文』第五卷第十号、昭和十

年九月)

「伊低児多婆里爾」(『奈良文化』第二十九号、昭和十年十二月)

「装図について」(『国語教室』第一卷第九号、昭和十年十二月)

「ごもく箱」(『国語解釈』第一卷第四号、昭和十一年四月)

「高山部」(『解釈と鑑賞』創刊号、昭和十一年六月)

「淀むとも」考」(『奈良文化』第三十号、昭和十一年六月)

「八行四段の音便について」(『音声学協会会報』第四十三号、昭和十一年八月)

「卷一の語法」(『短歌研究』第五卷第十号、昭和十一年十月)

「秀句の歌」(『帚木』第七卷第十一号、昭和十一年十月)

「紙鏡・友鏡・略図」(『国語・国文』第六卷第十号、昭和十一年十月)

「新校万葉集中二三の試訓について(連名)」(『文学』第五卷第一号、昭和十二年一月)

「風をだに恋ふるはともし」(『文学』第五卷第五号、昭和十二年五月)

「玉もりに珠は授けて」(『国語教室』第三卷第五号、昭和十二年五月)

「橋姫の巻雑考」(『古典研究』第二卷第十号、昭和十二年十月)

「文素」について」(『国語教室』第五卷第一号、昭和十四年一月)

「若紫」雑考」(『国語教室』第五卷第一号、昭和十四年一月)

「吾がまつの木ぞ」(『嚴樞』第九卷第一号、昭和十四年一月)

「やはーぬ」(『国語教室』第五卷第二号、昭和十四年二月)

「雑俎 草刈籠(一)」(『国語・国文』第九卷第二号、昭和十四年二月)

「敬語「まゐる」考」(『国語教室』第五卷第四号、昭和十四年四月)

「雑俎 草刈籠(二)」(『国語・国文』第九卷第八号、昭和十四年八月)

「源氏物語の敬語小考」(『日本諸学振興委員会研究報告』第三篇、昭和十四年九月)

- 「平仲物語補註」(『国語・国文』第十卷第二号、昭和十五年二月)
- 「雑俎 草刈籠(三)」(『国語・国文』第十卷第三号、昭和十五年三月)
- 「闇のうつつ」(『国語解釈』第五卷第五号、昭和十五年五月)
- 「卷十一 私訓二三」(『国語と国文学』第十七卷第十号、昭和十五年十月)
- 「国語を愛する国民の協力」(『文学』第九卷第四号、昭和十六年四月)
- 「詞林逍遙(一)〜(十一)」(『国語・国文』第十一卷第八号〜第十五卷八号、昭和十六年八月〜昭和二十一年九月)
- 「助詞『を』について」(『文学』第十卷第十号、昭和十七年十月)
- 「已然形でいひ放つ法」(『万葉雜記』晃文社、昭和十七年十月)
- 「鬱と髣髴」(『国語と国文学』第十九卷第十一号、昭和十七年十一月)
- 「鳥翔成」(『短歌研究』第十二卷第十号、昭和十八年十月)
- 「命令形について」(『日本諸学研究報告』第二十篇、昭和十九年四月)
- 「はしきやし誰がさふれかも」(『文学』第十二卷第十号、昭和十九年十月)
- 「朝みでに來鳴くかほ鳥」(『国文学叢書』青磁社、昭和十九年十一月)
- 「万葉集卷十辭案二題」(『国語と国文学』第二十一卷第十二号、昭和十九年十二月)
- 「言盡のさきはふ国」(『短歌研究』第十四卷第二号、昭和二十年二月)
- 「見わたしの近きわたりを」(『文学』第十四卷第二号、昭和二十一年二月)
- 「伐る船木」(『国語国文』第十五卷第六・七号、昭和二十一年九月)
- 「母にさはらば」(『短歌研究』第十六卷第一号、昭和二十二年一月)
- 「外ゆく波の外心」(『日本の言葉』第一卷第五号、昭和二十二年十月)
- 「信濃にあんなる木曾路川」から」(『国語学会会報』第七号、昭和二十二年十一月)
- 「枕詞と序詞について」(『万葉集』第六号、昭和二十三年一月)
- 「いはゆる詠歎の『なり』について」(『国語研究第一輯』新日本図書、昭和二十三年六月)
- 「葵の巻とところどころ」(『源氏物語講座中巻』紫之故郷社、昭和二十四年十月)
- 「詠嘆の『かも』の係」(『東京文理大國語国文学会会報』、昭和二十四年十二月)
- 「まほし」(『学苑』第百一十一号、昭和二十五年三月)
- 「其故——万葉のことば——」(『国語国文』第二十卷第一号、昭和二十六年一月)
- 「疑問文か平叙文か」(『日本文学教室』第八号、昭和二十六年三月)
- 「直接話法と間接話法」(『学苑』第百二十七号、昭和二十六年七月)
- 「らむ」について」(『国文学』関西大学』第五号、昭和二十六年九月)
- 「文法入門」(『国語学』第八輯、昭和二十七年一月)
- 「まぎれやすい助動詞や助詞の見分け方」(『解釈と鑑賞』第十七卷第二号、昭和二十七年二月)
- 「詞苑逍遙(一)〜(三)」(『国語』第一卷第二号〜第二卷第一号、昭和二十七年三月〜昭和二十八年三月)
- 「がね」と「がに」(『学苑』第百四十号、昭和二十七年十月)
- 「枕草子二題」(『国語国文』第二十一卷第九号、昭和二十七年十月)
- 「はさみこみ」(『国語国文』第二十二卷第一号、昭和二十八年一月)
- 「享受力と発表力——解釈力と創作力との関係——」(『解釈と鑑賞』第十八卷第四号、昭和二十八年四月)
- 「接統助詞『もの』と『が』とについて」(『金田一博士古稀記念言語民俗論叢』三省堂、昭和二十八年五月)
- 「限なき御思どち」(『源氏物語注解一』(『解釈と鑑賞』第十八卷第五号、昭和二十八年五月。以下「源氏物語注釈」として「浮舟(十四)」(昭和

四十六年三月) まで百九十四回連載)

「筆のそれ」(『国語学』第十三・十四輯、昭和二十八年十月)

「なれや」とある古今集の歌について」(『学苑』第百五十三号、昭和二十八年十月)

「万葉集の動詞・助動詞」(『解釈と鑑賞』第十八卷第十二号、昭和二十八年十二月)

「万葉片々 手玉鳴裳」(『万葉』第十号、昭和二十九年一月)

「ことば」(『教育研究』(東京教育大付属小学校)、昭和二十九年九月)

「中学校における文法教育について」(『中等教育技術』、昭和二十九年九月)

「万葉語研究——「恵得」と「あしびのにくからぬ」——」(『万葉研究』第七号、昭和二十九年十月)

「万葉語研究——「新室のこどき」と「生ひざりし草」——」(『万葉研究』第八号、昭和三十年五月)

「なにがしさぶらふ——枕草子、草の庵の段——」(『解釈』第一卷第一号、昭和三十年五月)

「「らむ」について」(『未定稿』第二号、昭和三十年十一月)

「文法をこう考える」(『学苑』第百八十五号、昭和三十一年一月)

「源氏物語末摘花の一節」(『武蔵野文学』2、昭和三十一年二月)

「なにはのうら」(『国語』第四卷第三号、昭和三十一年六月)

「万葉集の文法と語法」(『国文学』第一卷第三号、昭和三十一年九月)

「ニアリからデアルへ」(『国語学』第二十六輯、昭和三十一年十月)

「仕うまつりにくき宮仕にこそ侍れや」(『未定稿』第三号、昭和三十一年十一月)

「鶉にしもあれや」(『文学・語学』第四号、昭和三十一年六月)

「古今集の文法」(『国文学』第二卷第七号、昭和三十一年七月)

「源氏物語の文法」(『解釈と鑑賞』第二十二卷第十号、昭和三十一年十月)

「解釈文法とは」(『出版ダイジェスト』第三百二十一号、昭和三十一年十月)

「徒然草の正しい解釈のために」(連名) (『解釈と鑑賞』第二十二卷第十二号、昭和三十一年十二月)

「古典の解釈と文法」(『日本文法講座第四卷 解釈文法』明治書院、昭和三十三年二月)

「間接助詞——を・や——」(『解釈と鑑賞』第二十三卷第四号、昭和三十三年四月)

「国語文法の交遷」(『国語教育のための国語講座第五卷 文法の理論と教育』朝倉書店、昭和三十三年八月)

「文法教育の重点」(『国語シリーズ三十八』文部省、昭和三十三年九月)

「むらさきの匂へる妹」(『文学・語学』第九号、昭和三十三年九月)

「かけは離れじ」(『国語国文』第二十七卷第十一号、昭和三十三年十一月)

「講座 徒然草(一)〜(九)」(連名) (『言語と文芸』創刊号、昭和三十三年十一月〜第二卷第五号、昭和三十五年十月)

「助動詞の規定と歴史的展開」(『国文学』第四卷第二号、昭和三十三年十二月)

「歌における「AはBなり」式の言い方」(『武蔵野文学』6、昭和三十一年二月)

「どれが源氏物語の正しい解釈だろうか」(『解釈と鑑賞』第二十四卷第五号、昭和三十四年四月)

「助詞の史的展開」(『国文学』第四卷第九号、昭和三十四年七月)

「現代文の解釈と文法」(『国語教育』第一卷第四号、昭和三十四年七月)

「左手纏師子」について」（『美夫君志』創刊号、昭和三十四年十月）

「太液の芙蓉」（『未定稿』第七号、昭和三十四年十二月）

「万葉集における敬語」（『国文学』第五卷第二号、昭和三十五年一月）

「古今集の解釈と文法上の問題点——四季の歌と恋の歌のほかで——」（『講座
解釈と文法第二卷』明治書院、昭和三十五年二月）

「文章論についての私見」（『国文学』第五卷第九号、昭和三十五年七月）

「古典教育について」（『国語教育』第二卷第八号、昭和三十五年九月）

「係りか、言い切りか——「か」の場合——」（『武蔵野文学』8、昭和三十
六年二月）

「万葉集の注釈書」（『解釈と鑑賞』第二十六卷第三号、昭和三十六年二月）

「係りか、言い切りか——「已然形」や——」（『言語と文芸』第三
卷第二号、昭和三十六年三月）

「奥爾念乎見賜吾君 私案」（『未定稿』第八号、昭和三十六年三月）

「知る」という語をめぐって」（『古文研究』1、昭和三十六年九月）

「須磨の巻とところどころ」（『古文研究』1、昭和三十六年九月）

「常を無みこそ」（『古文研究』1、昭和三十六年九月）

「喚休の歌——古今集と万葉集——」（『日本文学研究』創刊号、昭和三十六年
十月）

「ここに」と「ここにありて」（『古文研究』2、昭和三十六年十
二月）

「一種の『ずは』について」（『古文研究』2、昭和三十六年十二月）

「須磨の巻とところどころ」（『古文研究』2、昭和三十六年十二月）

「袖の涙川」（『古文研究』2、昭和三十六年十二月）

「平家物語と近代語」（『武蔵野文学』9、昭和三十七年一月）

「文法と解釈」（『国語シリーズ』四十九 文部省、昭和三十七年三月）

「已然形」ばの条件法について」（『東洋研究』二・三、昭和三十七年
三月）

三月）

「の」か「が」か」（『日本文学研究』第二号、昭和三十七年十一月）

「助詞の「の」をめぐって」（『大東文化大学紀要』第二号、昭和三十八年
三月）

三月）

「小さな問題二つ三つ」（『古文研究』3、昭和三十八年七月）

「蓬生の巻から（一）」（『古文研究』3、昭和三十八年七月）

「橘」は何か」（『古文研究』4、昭和三十八年十二月）

「あり」と「なし」（『古文研究』4、昭和三十八年十二月）

「蓬生の巻から（二）」（『古文研究』4、昭和三十八年十二月）

「さし向かひたる」（『言語と文芸』第六卷第四号、昭和三十九年七月）

「古典解釈と助動詞」（『国文学』第九卷第十三号、昭和三十九年十月）

「古代語と現代語」（『大東文化大学紀要』第三号、昭和四十年一月）

「口語文法と文語文法」（『口語文法講座』1 口語文法の展望』明治書院、
昭和四十年二月）

昭和四十年二月）

「二様に読めるもの」（『古文研究』5、昭和四十年八月）

「打消の助動詞「ず」について」（『古文研究』5、昭和四十年八月）

「夢にだに——「だに」と「さへ」、「む」と「らむ」に関して——」（『古文研究』5、
昭和四十年八月）

昭和四十年八月）

「思いつき」（『古文研究』5、昭和四十年八月）

「あやな」（『滋賀大國文』第四号、昭和四十二年三月）

「肥後集とところどころ」（『学苑』第三百四十一号、昭和四十三年五月）

「言語史」（『講座日本文学十二 日本文学研究の諸問題』三省堂、昭和四
十四年六月）

十四年六月）

「然る故を推量する『らむ』を用いた歌（古今和歌集について）」（『東

「洋研究」二十三、昭和四十五年六月)

「格助詞 が・の・つ」(『解釈と鑑賞』第三十五卷第十三号、昭和四十五年十一月)

「大船の思ひたのみて」にこだわって」(『境田教授喜寿記念論文集』前田書店、昭和四十九年十一月)

「は」と「ぞ」(『言語と文芸』第八十一号、昭和五十年十月)

「並立関係でまとまる語句」(『国語研究』第三十九号、昭和五十一年三月)

「日本文法における私の歩み」(『佐伯梅友博士喜寿記念国語学論集』表現社、昭和五十一年十二月)

「秋の野におく白露は玉なれや」(『古文研究』でなおし、昭和五十一年十二月)

「なれや」つけたし」(『古文研究』でなおし、昭和五十一年十二月)

「夕霧の巻から」(『日本文学研究』第十六号、昭和五十二年一月)

「文脈の整理」(『解釈』第二十三卷第九号、昭和五十二年九月)

「しづ心なく花の散るらむ」(『古文研究』でなおし、昭和五十二年十二月)

「われにもが」存疑」(『石井庄司博士喜寿記念論集』楳書房、昭和五十三年五月)

「古今集の歌の疑問語をめぐって」(『古文研究』でなおし、昭和五十三年十二月)

「橘姫の巻から」(『古文研究』でなおし、昭和五十三年十二月)

「文法中心の読み方」(『日本文学研究』第十九号、昭和五十五年二月)

「ねを泣く」(『解釈』第二十七卷第十二号、昭和五十六年十二月)

「などかはあらむ」と「聞ゆ」とを問題として」(『解釈』第二十八卷第三号、昭和五十七年三月)

「松風の巻の別離の場面」(『古文研究』でなおし、昭和五十八年十二月)

「わざ」という語について」(『古文研究』でなおし、昭和五十八年十二月)

「古文を文法的に読むこと」(『国語国文論集(学習院女子短大)』第十四号、昭和六十年三月)

「古典を文法的に読む」(『日本語学』第五卷第四号、昭和六十一年四月)

「古典を文法的によむということ」(『解釈と鑑賞』第五十一卷第八号、昭和六十一年八月)

「古文の文法読み一例」(『国語学』七、和泉書院、昭和六十一年十二月)

「わたしの歩んだ道」(『日本語学』第六卷第九号、昭和六十二年九月)

「あつめることのおもしろさ」(『解釈と鑑賞』第五十四卷第一号、昭和六十四年一月)

「文法的読み」(『解釈』第三十六卷第十号、平成二年十月)

「文の読解について」(『研究会報告(大東文化大学日本語文法研究会)』第十三号、平成四年三月)

—— 目白大学教授 ——